

みにくいアヒルの子

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

いなかは、ほんとうにすてきでした。夏のことです。コムギは黄色くみのついていますし、カラスミギは青々とのびて、緑の草地には、ほし草が高くつみ上げられていました。そこを、コウノトリが、長い赤い足で歩きまわっては、エジプト語でぺちやくちやと、おしゃべりをしていました。コウノトリは、おかあさんから、エジプト語をおそわっていたのでした。

畑と草地のまわりには、大きな森がひろがっていて、その森のまんなかには、深い池がありました。ああ、いなかは、なんてすばらしいのでしょうか！　そこに、暖かなお日さまの光をあびて、一けんほりわの古いお屋敷がありました。まわりを、深い掘割りにかこまれていて、へいから水ぎわまで、大きな大きなスカンポが、いっぱいしげっていました。スカンポは、とても高くのびていましたから、いちばん大きいスカンポの下では、小さな子供なら、まっすぐ立つこともできるくらいでした。そこは、まるで、森のおく深くみたい、ぼうぼうとしていました。

ここに、アヒルの巣がありました。巣の中には、一羽のおかあさんのアヒルがすわって、今ちようど、卵をかえそうとしていました。けれども、かわいい子供は、なかなか生れて

きませんし、それに、お友だちもめつたに、あそびにきてくれないものですから、今では、もうすっかり、あきあきしていました。ほかのアヒルたちにしてみれば、わざわざ、このおかあさんのところへ上つて行って、スカンポの下におとなしくすわって、おしやべりなにかするよりも、掘割りの中を、かっさに泳ぎまわっているほうが、おもしろかったのです。

とうとう、卵が一つ、また一つと、つぎつぎに割れはじめました。ピー、ピー、と、鳴きながら、卵のきみが、むくむくと動き出して、かわいい頭をつき出しました。

「ガー、ガー。おいそぎ、おいそぎ」と、おかあさんアヒルは、言いました。すると、子供たちは、大いそぎで出てきて、緑の葉っぱの下から、四方八方を、きよろきよろ見まわりました。そのようすを見て、おかあさんは、みんなに見たいだけ見せてやりました。なぜって、緑の色は、目のためにいいですからね。

「世の中って、すごく大きいんだなあ！」と、子供たちは、口をそろえて言いました。もちろん、卵の中にいたときとは、まるでちがうのですから、こう言うのも、むりはありません。

「おまえたちは、これが、世の中のぜんぶだとも思っているのかい？」と、おかあさん

アヒルは言いました。「世の中っていうのはね、このお庭のむこうのはしをこえて、まだまだずうつと遠くの、ぼくし牧師さんの畑のほうまで、ひろがっているんだよ。おかあさんだつて、まだ行つたことがないくらいなのさ！——ええと、これで、みんななんだね」

こう言つて、おかあさんアヒルは、立ちあがりました。

「おや、まだみんなじゃないわ。いちばん大きい卵が、まだのこっているね。この卵は、なんて長くかかるんだろう！ほんとに、いやになつちやうわ」こう言いながら、おかあさんアヒルは、しかたなく、またすわりこみました。

「ちよいと、どんなぐあいかね？」と、そのとき、おばあさんのアヒルが、お見舞いにきて、こうたずねました。

「この卵が、一つだけ、ずいぶんかかりましてねえ！」と、卵をかえしていた、おかあさんアヒルが、言いました。「いつまでたつても、穴があきそうもありませんの。でも、まあ、ほかの子たちを見てやつてくださいいな。みんな、見たこともないほど、きれいなアヒルの子供たちですわ！おとうさんにそっくりなんですのよ。それなのに、あのしようない人つたら、お見舞いにもきてくれななんですの」

「どれ、どれ、その割れないという卵を、わたしに見せてごらん！」と、おばあさんアヒ

ルは、言いました。「こりやあね、おまえさん、シチメンチョウの卵だよ。わたしも、いつか、だまされたことがあつてね。そりやあ、ひどい目にあつたもんさ。生れた子供には、さんざん苦勞させられてね。だって、おまえさん、その子つたら、水をこわがるんだからね。いくら、水の中へ入れてやろうと思つたつて、だめだったよ。どんなに、わたしががみがみ言つて、つつつこうと、食いつこうと、そりやあ、どうしたつて、だめなのさ！

——その卵を見せてごらん。ああ、やつぱり、シチメンチョウの卵だよ！ こりやあ、このままにしておいて、ほかの子供たちに、泳ぎでも教えてやるほうがいいね」

「でも、もうすこし、すわつていてみますわ」と、おかあさんアヒルは、言いました。

「せつかく、長いあいだ、こうやつてすわつていたんですもの。もうすこし、がまんしてみます」

「まあ、お好きなように」おかあさんアヒルは、こう言つて、行つてしまいました。

とうとう、その大きな卵が割れました。ピー、ピー、と、ひよこが鳴きながら、ころがり出てきました。ところが、その子つたら、ずいぶん大きくて、ひどくみつともないかつこうをしています。おかあさんアヒルは、その子をじいとながめて、言いました。「まあ、とんでもなく大きい子だこと！ ほかの子には、似てもいやしない！ こりやあ、ほ

んとうに、シチメンチョウの子かもしれないよ。まあ、いいわ。すぐわかるんだもの。ひとつ、水のところへ連れてって、つきとばしてやりましょう」

あくる日は、すっかり晴れわたって、とても気持ちのよいお天気でした。お日さまは、キラキラとかがやいて、緑のスカンポの上を照らしています。おかあさんアヒルは、子供たちをみんな連れて、掘割りにやってきました。パチャーン！ と、おかあさんは、まっさきに水の中へとびこんで、「ガー、ガー。さあ、おいそぎ！」と、みんなに言いました。すると、アヒルの子供たちは、一羽ずつ、あとからあとからとびこみました。水が頭の上までかぶさりましたが、みんなは、すぐに浮び上がって、じょうずに泳ぎ出しました。足は、ひとりでに動きました。こうやって、みんなは水の上に浮んでいました。見れば、あのみにくい灰色の子も、いっしょに泳いでいます。

「あら、あの子はシチメンチョウなんかじゃないわ」と、おかあさんアヒルは、言いまして。「まあ、まあ、足をとつてもじょうずに使っていること！ からだも、あんなにまっすぐ起してさ！ もう、あたしの子にまちがないわ。それに、よくよく見れば、やつぱりかわいいもの。ガー、ガー、——さあ、みんな、おかあさんについておいで。おまえたちを、世の中へ連れてってあげるからね。鳥小屋のみなさんにも、ひきあわせてあげるよ。

だけど、おかあさんのそばから離れちゃいけないよ。ふまれたりすると、たいへんだからね。それから、ネコに気をおつけ！」

そのうちに、みんなは、鳥小屋につきました。ところが、そこでは、おそろしいさわぎの起っている、まつさいちゆうでした。二けんの家のものが、一つのウナギの頭を取りっこして、けんかをしていたのです。ところが、そのあいだに、ネコが、横から取っていつてしまいました。

「いいかい、世の中って、こんなものなんだよ」と、アヒルの子供たちのおかあさんは、言いながら、自分も、くちばしをピチャピチャやりました。ほんとうは、おかあさんも、ウナギの頭がほしかったのです。

「さあ、今度は、足を使うようにしましょうね」と、おかあさんアヒルは、言いました。

「みんな、いそいで行けるかしらねえ。いいこと、あそこにいる、アヒルのおばあさんの前へ行ったら、おじぎをするんですよ。あの方は、ここにいるひとたちの中で、いちばん身分の高いひとだからね。スペインで生れたひとなんだよ。だから、あんなにふとつていらつしやるのさ！ それから、ほら、足に赤い布をつけているでしょう。きれいで、すてきじゃないの。あれはね、わたしたちアヒルがもらうことのできる、いちばんりっぱ

な 勲章くんしょう なんだよ！ あれをつけているのはね、あのひとがいなくならないようにとい
うためと、動物からも、人間からも、すぐわかるようにというためなんだよ。――

さあ、さあ、いそいで！――足を内側へ向けるんじゃないやありませんよ。おぎょうぎのい
いアヒルの子は、足をぐつと、外側へ開くんですよ。そら、おとうさんや、おかあさんを
見てごらん。いいかい、こんなふうにするのよ。さあ、今度は首をまげて、ガー、と、言
つてごらん」

そこで、子供たちはみんな、言われたとおりにしました。ほかのアヒルたちが、まわり
に集まってきて、みんなをじろじろながめながら、大きな声で言いました。「おい、見ろ
よ。また、チビが、うんとこさやってきたぞ！ おれたちだけじゃ、まだ足りないってい
うみたいだ。チエツ、あのアヒルの子は、ありやあ、なんてやつだ。あんなのはごめんだ
ぜ」――そして、すぐに、一羽のアヒルがとんできて、その子の首すじにかみつきました。
「ほつといてちようだい」と、おかあさんアヒルは、言いました。「この子は、なんにも
しないじゃないの」

「うん。だけど、こいつ、あんまり大きくて、へんてこだもの」と、いま、かみついたア
ヒルが、言いました。「だから、追っばらっちゃうんだ」

「かわいい子供さんたちだねえ、おかあさん！」と、足に布をつけている、おばあさんのアヒルが、言いました。「みんな、かわいい子供たちだよ。でも、一羽だけは、べつだがね。かわいそうに。作りかえることができれば、いいのにねえ！」

「そうはまいりませんわ、奥さま！」と、おかあさんアヒルは、言いました。「この子は、かわいらしくは見えませんが、でも気だては、たいへんよいのでございます。それに、泳ぐことも、ほかの子供たちと同じようにできます。いいえ、かえって、すこしじょうずなくらいでございますわ。大きくなれば、もうすこしきれいにもなりましょうし、時がたてば、小さくもなりますでしょう。きつと、卵の中に長くいすぎたものですから、こんなへんな形になってしまいましたのでしよう」こう言つて、その子の首すじをつついて、羽をきれいにおしてやりました。

「それに、この子は男の子なんでございますもの」と、おかあさんアヒルは言いました。「ですから、かっこうのわるいなんてことは、どうでもいいことだと思えますわ。きつと、りっぱな強いものになつて、生きていつてくれるだろうと、思います」

「ほかの子たちは、ほんとうにかわいいね」と、おばあさんアヒルは、言いました。「さあ、さあ、みんな。自分のうちにいるようなつもりで、らくにしておいで。それから、お

まえさんたち、ウナギの頭を見つけたら、わたしのところへ持ってきておくれよ。いいかね」――

こう言われたものですから、みんなは、うちにいるように、らかな気持ちになりました。けれども、いちばんおしまいに卵から出てきた、みにくいかつこうのアヒルの子だけは、かわいそうに、アヒルの仲間たちばかりか、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つかれたり、ばかにされたりしました。

「こいつ、でかすぎるぞ！」と、みんながみんな、こう言うのです。なかでも、シチメンチヨウは、生れつきけづめを持つていたので、皇帝のようなつもりでいたのですが、それだけに、このアヒルの子を見ると、帆に風をいっぱい受けた船のように、からだをぷうつとふくらませて、つかつかと近よってきました。そして、のどをゴロゴロ鳴らしながら、顔をまっかにしました。これを見ると、かわいそうなアヒルの子は、もうどうしたらよいのか、わかりません。自分の姿が、たいそうみにくいために、みんなから、こんなにまでもばかにされるのが、なんともいえないほど悲しくなりました。

さいしよの日は、こんなふうにしてすぎましたが、それから、だんだんわるくなるばかりです。かわいそうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。にいさんや、ね

えさんたちさえも、やさしくしてくれるどころか、かえっていじわるをして、いつも言うのでした。

「おい、みつともないやつ。おまえなんか、ネコにでもつかまっちまえばいいんだ！」

おかあさんも、

「おまえさえ、どこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言いました。ほかのアヒルたちには、かみつかれ、ニワトリたちには、つつきまわされました。鳥にえさをやりにくる娘からは、足でけとばされました。

とうとう、アヒルの子は逃げだして、生いけがき垣をどびこえました。すると、やぶの中に入った小鳥たちが、びっくりして、ぱつと舞いあがりしました。

「ああ、これも、ぼくがみつともないからなんだなあ！」と、アヒルの子は思って、目をつぶりました。けれども、どんどんさきへ走っていききました。やがて、野ガモの住んでいる、大きな沼地に出ました。アヒルの子は、ここで、一晩ねることにしました。だって、ここまできたら、もうすっかりくたびれていましたし、それに、悲しくつてたまらなかつたのですもの。

朝になると、野ガモたちはとびたつて、あたらしい仲間を見つけました。「きみは、い

つたい何者だい？」と、みんなは、たずねました。アヒルの子は、あっちへもこっちへも、できるだけていねいにおじぎをしました。

「きみはまた、おつそろしく、みつともないかつこうをしているな」と、野ガモたちは、言いました。「でも、そんなことは、どうだっていいや。ぼくたちの家族のものと結婚しなけりや、いいんだ」

かわいそうなアヒルの子は、結婚なんて、夢にも思ってみたことがありません！ それどころか、ただ、アシのあいだに休ませてもらって、沼の水をほんのすこし飲ませてもらえば、それだけでよかったです。

アヒルの子は、そこに二日のあいだ、いました。すると、そこへ、おすのガンが二羽、とんできました。このガンは、卵から出て、まだ、いくらもたっていないませんでしたから、すこしむてつぼうすぎました。

「おい、きみ！」と、ガンは言いました。「きみは、なんて、みつともないかつこうをしているんだ！ だけど、ぼくは、そのみつともないところが気にいった。どうだい、いつしよに行つて、渡り鳥にならないかい？ じつは、この近くのもう一つの沼にな、きれいな、かわいい女のガンが二、三羽、住んでいるんだ。むろん、みんなお嬢さんさ。ガー、

ガー、つて、じょうずにおしやべりすることもできるんだ。きみが、いくらみつともないかつこうでも、そこへ行けば、幸福をつかむことができるんだぞ——

「ダーン、ダーン！」と、そのとき、空で鉄砲の音がしました。とたんに、二羽のガンは、アシの中へ、まっさかさまに落ちて、死にました。水が、血の色でまっかにそまりました。「ダーン、ダーン！」と、また鉄砲の音がしました。すると、ガンのむれが、アシの中から、ぱつととびたちました。つづいて、また鉄砲の音がしました。大じかけの猟りようが、はじまったのです。かりゆうどたちは、沼のまわりを、ぐるりと取りまいていました。いや、中には、もっと近くまできて、アシの上へのび出ている木の枝に、腰をおろしている者さえ、二、三人ありました。青い煙が、まるで雲のように、うす暗い木々の間をぬけて、遠く水の面おもてにたなびいていました。

沼の中へ、猟犬が、ピシャツ、ピシャツと、とびこんできました。アシは、あっちへもこっちへも、なびきました。かわいそうに、アヒルの子にとっては、なんというおそろしい出来事だったでしょう！ アヒルの子は、びっくりぎょうてんしました。思わず、頭をちぢこめて、羽の下にかくしました。

と、ちょうどその瞬間、おそろしく大きなイヌが、すぐ目の前にとび出してきました。

舌はだらりと長くたらしめて、目はぞっとするほど、ギラギラ光っていました。鼻づらを、アヒルの子のほうへぐつと近づけて、するどい歯をむきだしました。――

ところが、どうしたというのでしょうか。アヒルの子にはかみつきもしないで、また、ピシヤツ、ピシヤツと、むこうへもどっていつてしまいました。

「ああ、ありがたい！」と、アヒルの子は、ほつとして、言いました。「ぼくが、あんまりみつともないものだから、イヌまでかみつかないんだな」

アヒルの子は、そのまま、じつとしていました。けれど、そのあいだも、ひっきりなしに、鉄砲のたまが、アシの中へとんできて、ザワザワと音をたてました。

お昼すぎになつてから、やつと、あたりが静かになりました。けれども、かわいそうなアヒルの子は、すぐには、起きあがる元気もありませんでした。それから、また、だいぶ時間がたつてから、やつと、あたりを見まわしました。そして、大いそぎで、沼から逃げ出しました。畑をこえ、草原をこえて、どんどん走つていきました。そのうちに、はげしい風が吹いてきました。そのため、今度は、とつても走りにくくなりました。

夕方ごろ、とあるみすぼらしい、小さな百姓ひやくしやうや家にたどりつきました。その家は、見るもあわれなありさまで、自分でも、どっちへたおれようとしているのか、わからないよ

うなようすでした。それでも、まだ、とにかく、こうして、立っているのです。そうしているうちにも、風が、ピューピュー吹きつけてきました。アヒルの子は、たおれないようにするために、風のほうへしつぽを向けて、からだをささえなければなりません。けれども、風は、ますますひどくなるばかりです。そのとき、ふと見ると、入り口の戸のちやうつがい一つはずれていて、戸が、いくぶん開いています。どうやら、そのすきまから、部屋へやの中へ、はいつていくことができそうです。そこで、アヒルの子は、さっそく、そこからはいつていきました。

この家には、ひとりのおばあさんが、一ぴきのネコと、一羽のニワトリといっしょに住んでいました。おばあさんは、このネコのことを、「坊やちゃん」と呼んでいました。

「坊やちゃん」は背中をまるくしたり、のどをゴロゴロ鳴らしたりすることができました。そのうえ、火花を散らすこともできました。もともと、火花を散らすためには、だれかに、毛をさかさにこすってもらわなければなりません。ニワトリは、たいへんかわいらしい、短い足をしているので、おばあさんは、「短い足のコッコちゃん」と、呼んでいました。

「短い足のコッコちゃん」は、とつてもよい卵を生むので、おばあさんは、まるで、自分の子供みたいに、かわいがっていました。

あくる朝になると、ネコも、ニワトリも、すぐに、いままで見たことのない、アヒルの子がいるのに気がつきました。ネコは、のどをゴロゴロ鳴らし、ニワトリは、コッコと鳴きだしました。

「どうしたんだね？」と、おばあさんは言って、あたりを見まわしました。けれども、おばあさんは、目があんまりよくなかったものですから、このアヒルの子を、どこからか迷いこんできた、ふとつたアヒルだと、かんちがいしてしまいました。

「こりやあ、いいものはいってきてくれた」と、おばあさんは言いました。「これから、アヒルの卵も食べられるってわけだもの。だけど、おすのアヒルでなけりやいいがねえ。まあ、ためしに飼ってみるとしよう」

こういうわけで、アヒルの子は、三週間のあいだ、ためしに飼われることになりました。でも、もちろん、卵は生みませんでした。ところで、この家では、ネコがご主人で、ニワトリが奥さんでした。そして、いつもふたりは、「われわれと世界は！」と、言っていました。なぜって、ふたりは、おたがいの世界のよいはんぶんで、それも、いちばんよいはんぶんだと、思っていたからです。アヒルの子は、これとはちがったふうに見えることもできるような気がしました。でも、ニワトリは、それをみとめてくれませんでした。

「あなたは、卵を生むことができるの？」と、ニワトリはたずねました。

「いいえ」

「じゃあ、だまっていたらどう！」

すると、今度は、ネコが口を出しました。

「おまえは、背中をまるくすることができるかい？ のどをゴロゴロ鳴らすことができるかい？ それから、火花を散らすことができるかい？」

「いいえ」

「じゃあ、りこうな人たちが話しているときは、だまっているものだよ」

こうして、アヒルの子は、すみっこにひっこんでいましたが、ちっともおもしろくはありません。そうしているうちに、すがすがしい、気持のよい空気と、お日さまの光が、なつかしく思い出されてきて、たまらないほど、水の上を泳ぎたくなってきました。アヒルの子は、とうとう、がまんができなくなつて、そのことを、ニワトリの奥さんにうちあけました。

「あなた、何を言うのよ」と、ニワトリの奥さんは、言いました。「なんにもすることがないもんだから、そんなとんでもない気まぐれを起すんだよ。卵でも生むとか、のどでも

鳴らすとかしてごらん。そんなばかげた気まぐれは、どっかへとんでっちやうから」

「でも、水の上を泳ぐのは、すばらしいんですよ」と、アヒルの子は言いました。「頭から水をかぶったり、水の底のほうまでもぐっていったりするの、とつても楽しいんですよ」

「ふん、さぞかし、楽しいでしょうよ」と、ニワトリの奥さんは、言いました。「あなたは、気でもちがったんだよ。じゃあ、ネコのだんなさんに聞いてごらん。あのひとは、あたしの知っている人の中で、いちばんりこうな方だがね、あのひとに、水の上を泳いだり、もぐったりするのは、お好きですか、さ！ あたしは、自分のことはなんにも言いたかないわ。——あたしたちのご主人のおばあさんにも、聞いてごらん。あのおばあさんよ、りこうな人は、世の中にはいないんだよ。あなた、いったい、あのおばあさんが、泳いだり、水を頭からかぶったりするのが好きだとしても、思うの？」

「ぼくの言うことが、あなたがたには、おわかりにならないんです！」と、アヒルの子は、言いました。

「ふん、あたしたちにおまえさんの言うことがわからなければ、いったい、だれにならわかるっていうの？ あんた、まさか、ネコのだんなさんや、あのおばあさんよりも、自分

のほうがりこうだなんて、言うんじゃないだろうね。まあ、あたしは、別にしたところできさ！ あんまり、なまいきなことを言うんじゃないよ！ 子供のくせに！ そんなことばかり言つてないで、まあ、まあ、ひとが親切にしてくれたことでも、ありがたく思うんだね。

あんたは、こうして暖かい部屋に入れてもらって、あたしたちの仲間に入れてもらったんじゃないか。おまけに、いろんなことまで、教えてもらったんじゃないの！ それだけに、あんたはまぬけよ！ あたしはあんたのことを思うからこそ、こないやなことまで言うんだけど、さ、ね！ あたしはあんたのことを思うからこそ、こないやなことまで言うってしまうのよ。だから、ほんとのお友だちというものさ。さあ、さあ、これからは、いっしょうけんめいに、卵を生むとか、のどをゴロゴロ鳴らして、火花でも散らすようにするといいわ！」

「でも、ぼくは、外の広い世の中へ、出ていきたいんです！」と、アヒルの子は、言いました。

「それなら、かってにおし！」と、ニワトリの奥さんは、言いました。

そこで、アヒルの子は出ていきました。そして、楽しそうに水の上を泳いだり、水の中

にもぐつたりしました。けれども、姿がみにくいために、どの動物からも相手にされませんでした。

やがて、秋になりました。森の木の葉は、黄色や茶色になりました。強い風が吹いてくると、木の葉は、くるくると舞いあがりました。高い空のほうは、寒々としていました。雲は、あられや雪をふくんで、どんよりと、たれさがっていました。生垣の上には、カラスがとまって、いかにも寒そうに、カー、カーと、鳴いていました。考えてみただけでも、ぶるぶるつとしそうな寒さです。こんなとき、あのアヒルの子はどうしていたでしょう。かわいそうに、すっかり弱っていました。

ある夕方、お日さまが、キラキラと美しくかがやいて、しずみました。そのとき、アヒルの子がまだ見たこともないような、美しい大きな鳥のむれが、茂みの中からとびたちました。みんな、からだじゅうが、かがやくようにまっ白で、長い、しなやかな首をしています。それは、ハクチョウたちだったのです。ハクチョウのむれは、ふしぎな声をあげながら、美しい大きなつばさをひろげて、寒いところから暖かい国へいこうと、広い広い海をめぐって、とんでいくところでした。ハクチョウたちは、高く高くのぼって行きました。それを見ているうちに、みにくいアヒルの子は、なんともいえない、ふしぎな気持ちにな

りました。それで、水の中で、車の輪のように、ぐるぐるまわると、首をハクチョウたちのほうへ高くのぼして、自分でもびっくりするほどの、大きな、ふしぎな声をあげて、さげびました。ああ、なんとという美しい鳥でしょう！あの美しい鳥、幸福な鳥を、アヒルの子は、けっして忘れることができませんでした。

ハクチョウたちの姿が見えなくなると、みにくいアヒルの子は、水の底までもぐっていききました。けれども、もう一度浮びあがったときには、まるで、むがむちゅうになっていました。アヒルの子は、あの美しい鳥がなんとという名前なのか知りません。そして、どこへとんでいったのかも知りません。けれども、いままでのどんなものよりも、いちばんなつかしく思われるのです。なんだか、好きで好きでたまらないのです。でも、うらやましいなどは、すこしも思いませんでした。アヒルの子にしてみれば、あんな美しい姿になろうなんて、どうして願うことができましょう。ただ、ほかのアヒルたちが、自分を仲間に入れてくれさえすれば、それだけで、どんなにうれしかしれないのです。——ああ、なんてかわいそうな、みにくいアヒルの子でしょう！

いよいよ、冬になりました。ひどい、ひどい寒さです。アヒルの子は、水の面おもてがすっかりこおってしまわないように、ひっきりなしに、泳ぎまわっていなければなりませんでし

た。けれども、一晚、一晚とたつうちに、泳ぎまわる場所が、だんだんせまくなり、小さくなりました。あたりは、まもなく、ミシミシと音をたてるほど、こおりついてきました。アヒルの子は、氷のために、泳ぐ場所をみんなふさがれてしまわないように、しよつちゅう、足を動かしていなければなりませんでした。でも、とうとうしまいには、くたびれきって、動くこともできなくなり、氷の中にとじこめられてしまいました。

つぎの朝早く、ひとりのお百姓さんが通りかかって、あわれなアヒルの子を見つけました。お百姓さんは、すぐさま、そばへやってきて、木靴きぐつで氷をくだいて、家のおかみさんのところへ持って帰りました。こうして、アヒルの子は生きかえりました。

お百姓さんの子どもたちは、大よろこびで、アヒルの子とあそぼうとしました。ところが、アヒルの子のほうは、またいじめられるにちがいないと思って、こわくてこわくてたまりません。で、あんまりびくびくしていたものですから、ミルクつぼの中へとびこんでしまいました。おかげで、ミルクが、部屋じゅうにとび散りました。おかみさんは大声でわめきたてて、両手を高く上げて、打ちあわせました。それで、アヒルの子は、またびつくりしてしまい、今度は、バターを入れてある、たるの中にとびこみました。それから、ムギ粉のおけの中へとびこんで、そのあげく、やつとのことと、とび出してきました。い

やはや、たいへんなさわぎです！ おかみさんは、きんきんした声でさげびながら、火ばしで、アヒルの子をぶとうとしました。いっぼう、子供たちは子供たちで、アヒルの子をつかまえようとして、ぶつかりつこをしては、笑ったり、わめいたり。いやもう、たいへんなことになりました！ ——

ところが、ありがたいことに、戸があけはなしになっていました。それを見るが早いか、アヒルの子は、いま降ったばかりの雪の中の、茂みの中へ、とびこみました。——そして、まるで冬眠でもしているように、そこに、じっとしていました。

さて、このあわれなアヒルの子が、きびしい冬のあいだに、たえしのばなければならなかった、苦しみや、悲しみを、みんなお話ししていれば、あまりにも悲しくなってしまう。——やがて、いつのまにか、お日さまが、暖かくながやきはじめました。そのころ、アヒルの子は、まだやつぱり、沼のアシのあいだに、じっとしていました。もう、ヒバリが歌をうたいはじめました。——いよいよ、すてきな春になったのです。

そのとき、アヒルの子は、きゆうに、つばさを羽ばたきました。すると、つばさは前よりも強く空気をうって、からだが、すうつと持ちあがり、らくらくとぶことができました。そして、なにがなんだか、よくわからないうちに、とある大きな庭の中に来ていまし

た。庭には、リンゴの木が美しく花を開き、ニワトコはよいにおいをはなつて、長い緑の枝を、静かにうねっている掘割りのほうへ、のぼしていました。ああ、ここは、なんて美しいのでしょうか！　なんて、あたらしい春のかおりに、みちみちているのでしょうか！

そのとき、目の前の茂みの中から、三羽の美しい、まっ白なハクチョウが出てきました。ハクチョウたちは羽ばたきながら、水の上をかるやかに、すべるように、泳いできました。アヒルの子は、この美しいハクチョウたちを知っていました。そして、いまその姿を見ると、なんともいえない、ふしぎな、悲しい気持ちになりました。

「ぼくは、あの美しい、りっぱなハクチョウたちのところへとんでいこう。けれど、ぼくはこんなにみにくいんだから、近よっていったりすれば、きつと殺されてしまうだろう。でも、いいや。どうせ、ぼくなんかは、ほかのアヒルからはいじめられ、ニワトリからはつつつかれ、えさをくれる娘からは、けとばされるんだもの。それに、冬になれば、いろんな悲しいことや、苦しいことを、がまんしなければならぬんだもの。それを思えば、ハクチョウたちに殺されるほうが、どんなにいいかしれやしない」こう思って、アヒルの子は水の上にとびおりて、美しいハクチョウたちのほうへ、泳いでいきました。これを見ると、ハクチョウたちは、美しく羽をなびかせながら、近づいてきました。

「さあ、ぼくを殺してください」と、かわいそうなアヒルの子は、言いながら、頭を水の
上にたれて、殺されるのを待ちました。——ところが、すみきった水の面には、おもていったい、
何が見えたでしょうか？ そこには、自分の姿がうつっていました。けれども、それはみ
にくくて、みんなにいやがられた、かつこうのわるい、あの灰色の鳥の姿ではありません。
それは、美しい一羽のハクチョウではありませんか。

そうです。ハクチョウの卵からかえったものならば、たとえば鳥小屋で生れたにしても、
やっぱり、りっぱなハクチョウにちがいないのです。

アヒルの子は、いままでに受けてきた、さまざまの苦しみや、悲しみのことを思うにつ
けて、いまの幸福を心からうれしく思いました。そして、いまの自分に与えられている幸
福や、すばらしさが、いまはじめてわかりました。ほんとうに、なんてしあわせなこと
でしょう！ ——大きなハクチョウたちは、このあたらしいハクチョウのまわりを泳ぎなが
ら、くちばしで羽をなでてくれました。

そのとき、小さな子供たちが二、三人、お庭の中へはいつてきました。みんなは、パン
くずや、ムギのつぶを、水の中へ投げてくれました。そのうちに、いちばん小さい子が、
大声でさけびました。

「あつ、あそこに、あたらしいハクチョウがいるよ！」

すると、ほかの子供たちも、いつしよに、うれしそうな声をあげました。

「ほんとだ。あたらしいハクチョウがきた！」

みんなは、手をたたいて、踊りまわると、おとうさんとおかあさんのところへ駆かけていききました。それから、またパンやお菓子を投げこんでくれました。そして、だれもかれもが、言いました。

「あたらしいハクチョウが、いちばんきれいだね。とても若くて、美しいね」

すると、年上のハクチョウたちが、若いハクチョウのまえに頭をさげました。

若いハクチョウは、はずかしさでいっぱいになり、どうしてよいかわからなくなって、頭をつばさの下にかくしました。ハクチョウは、とてもとても幸福でした。でも、すこしも、いばったりはしませんでした。心のすなおなものは、けっして、いばったりはしないものなのです。ハクチョウは、いままで、どんなにみんなから追いかけられたり、ばかにされたりしたかを、思い出しました。けれども、いまは、みんなが、自分のことを、美しい鳥の中でもいちばん美しい、と、言ってくれているのです。ニワトコは、水の上のハクチョウのほうへ枝をさしのべて、頭をさげました。お日さまは、それはそれは暖かく、や

さしく照っていました。ハクチヨウは、羽を美しくなびかせて、ほっそりとした首をまっすぐに起しました。そして、心の底からよろこんで言いました。

「ぼくがみにくいアヒルの子だったときには、こんなに幸福になれようとは、夢にも思わなかった！」

青空文庫情報

底本：「マツチ売りの少女（アンデルセン童話集※【#ローマ数字3、1-13-23】）」新
潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1981（昭和56）年5月30日21刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作
られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みにくいアヒルの子

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>